Twinkle 東京女子医科大学学術リポジトリ
Tokyo Women's Medical University - Information & Knowledge Database
https://twinkle.repo.nii.ac.jp

Restless legs syndrome in hemodialysis patients: Prevalence and association to daytime functioning

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-11-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松井, 健太郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10470/31574

主 論 文 の 要 約

Restless legs syndrome in hemodialysis patients: Prevalence and association to daytime functioning
（血液透析患者におけるレストレスレッグス症候群と日中機能への影響に関する調査）

東京女子医科大学大学院
内科系専攻精神医学分野
（指導：石郷岡　純教授）㊞
松井　健太郎

Sleep and Biological Rhythms. Volume 13, Issue 2, pages 127-135, April 2015.に掲載

【目　的】

透析患者ではレストレスレッグス症候群（RLS)を高率に合併する。本研究は①血液透析（HD）患者における RLS 有病率ならびに合併症の実態を明らかにすること、②同患者において、RLS 症度や透析条件が、うつや QOL 等の日中症状に及ぼす影響を明らかにすること、を目的とした。

【対象および方法】

645 名の末期腎臓病(ESRD) 患者を対象に、1 週間のインターバルを開けて 2 点調査を施行した。社会統計学変数、透析条件（透析種別・期間・週あたりの回数)、合併症の有無のほか、RLS 診断における４つの主要症状、アテネ不眠尺度（AIS)、うつ病自己評価尺度（CES-D)、健康関連 QOL 尺度｛SF-8；身体的健康度（PCS)、精神的健康度（MCS）を含む}、国際レストレスレッグス症候群重症度評価尺度（IRLS）について、質問紙を用いて評価を行った。抑うつ傾向（CES-D>=16)、PCS および MCS の低下を従属変数とし、関連する要因について多重ロジスティック回帰分析を用いて検討した。

【結　果】

645 名の ESRD 患者のうち、2 回の調査で回答が得られた HD 患者 504 名（男性 332 名、女性 172 名）が調査の対象となった。2 回の調査で、いずれも RLS

診断基準を満たしたHD患者（stable RLS）は65名（12.9%）であった。2回の調査のうち1回RLS診断基準を満たしたHD患者（fluctuant RLS）が62名(12.3%)、2回のいずれも診断基準を満たさなかったHD患者（not RLS）が377名(74.8%)であった。

IRLS・AIS・CES-Dの総得点が、stable RLS群およびfluctuant RLS群においてnot RLS群よりも有意に高かった(すべて$p<0.01$)。高脂血症、疼痛、掻痒感、冠動脈疾患の既往がnot RLS群と比較し、stable RLS群で有意に高かった（高脂血症、疼痛、掻痒感で$p<0.01$、冠動脈疾患で$p<0.05$)。

抑うつ傾向には不眠（AIS>=6）のみが独立して関連した。PCS低下には年齢、透析期間、不眠、抑うつ傾向、RLSの重症度が独立して関連した一方、MCS低下には不眠、抑うつ傾向のみが独立して関連した。

【考　察】

今回、HD患者におけるRLS有病率は、アジアでの報告（14-23%）と比較しやや低かった。RLS患者では抑うつ傾向やQOL低下を来しやすいことが報告されている。今回の調査では、抑うつ傾向やMCSの低下にRLSの重症度は寄与しなかったが、不眠との交絡が原因として考えられた。

【結　論】

今回の2点調査ではHD患者におけるRLS有病率は12.9%であった。HD患者におけるRLSの重症度は身体的QOLの低下に関連するので、適切な診断および早期治療介入が望ましいと考えられた。